



六月部目録

△印あるは俳諧の季と持物

○穀養生の法。風雨の考。水の豊凶。妙茶の方。其外人家重法の考。如々あるは目録よりあるは

六月

卦 月支 調子
陰陽生 異名 六丁

小暑節

六丁 △大暑中 六丁

日令

此部は六月日の定りし事。又支の定りし事とあるは

氷室

△氷餅 六丁 △二夜の御飯 六丁

献禮酒

六丁 △一夜酒 六丁

勝曼祭

六丁 △富士詣 六丁

六月會

六丁 △天賦節 六丁

御表神麴

六丁 △水貯 六丁

祇園會

六丁 △山鉾 六丁

- △舟舁 △笠押 △岩倉 △白出山 △孟宗山
- △郭巨山 △夢破山 △瑞峰山 △白樂天山
- △太子山 △木賊川山 △芦刈山 △山伏山
- △花盗入山 △天神山 △鷄子



六月 目録

御躰御白	六月十一日	月次祭	六月五日
神今食	六月十日	解舞御舞	六月十日
祇園會	六月十日	竹生嶋祭	六月十日
津嶋祭	六月十日	芦御典	六月十日
熱田祭	六月十日	祇園臨時祭	六月十日
江戸山王祭	六月十日	富士雪解	六月十日
嘉祥祝	六月十日	嘉定鏡	六月十日
袖直	六月十日	外宮御祭礼	六月十日
志渡寺祭	六月十日	博多祭	六月十日
相國寺閣藏法	六月十日	御灵夏神樂	六月十日
内宮御祭礼	六月十日	嚴嶋祭	六月十日
賀茂平洗祭	六月十日	糺涼	六月十日
鞍馬竹切	六月十日	上難波御祭	六月十日
稻荷祭	六月十日	座摩御祭	六月十日

日四十

日六十

日七十

日九十

愛宕	六月九日	天満天神社	六月九日
天橋立祭	六月九日	節折	六月九日
水無月能	六月九日	鎮花祭	六月九日
川社	六月九日	形代	六月九日
小堀寺神	六月九日	茅の輪	六月九日
上賀茂水無月能	六月九日	住吉御祭	六月九日
唐崎十日詣	六月九日		

月令

此部は六月の月日の定まるるを記す

土用干	六月十日	施米	六月十日
雷鳴の陣	六月十日	香薫散	六月十日
夏節	六月十日	霍乱	六月十日
浚井	六月十日	三伏	六月十日

六月 目錄

九夏三伏

六丁 〇萬鬼行

六丁

△水樹合

六丁 △竹婦

六丁

△籠抗

六丁 〇漆取

六丁

△鴛鴨涼

六丁 △船遊

六丁

△汗流

六丁 △白袋

六丁

△簞

六丁 △泉

六丁

△清水

△清水源 △清水むら

六丁

△雲峯

六丁

時令

此部より八月一ヶ月の時 候の如く事とす

〇土用

六丁 △夕立

六丁

△露涼

六丁 △夏露

六丁

△風薫

六丁 △青嵐

六丁

△暑

六丁 △日盛

六丁

訪暑状

六丁 同報答

六丁

△涼

六丁 △納涼

六丁

△晚夏

△夜涼 △夜果 △夜多 △夏の別 △夏は涼と云を隔

草木

△夏の証 △名よ法 △此部より六月一ヶ月の くら木の類とあらむ

△百日紅

六丁 △南麻刈

六丁

△麻

六丁 △苧麻

六丁

△綿の花

六丁 竹皮散

六丁

△烏扇

六丁 △玉替花

六丁

△釣鐘草

六丁 △麒麟草

六丁

〇馬鞭草

六丁 〇猫見眼暗草

六丁

△剪春羅

六丁 △虎尾

六丁

△昼負

六丁 △夕負

六丁

△薔

六丁 〇南陸花

六丁

山慈姑

六丁 △路馬州

六丁

△蒲穂 六丁 蘿摩 六丁

△綠豆 六丁 芡実 六丁

△赤草 六丁 △慈姑 六丁

△河骨 六丁 △菱花 六丁

△蓮花 △白蓮 △紅蓮 六丁
△水竹 △池州 △葛粉 △金菱

△荷葉 六丁 △金蘭の花 六丁

△蘭刈 六丁 席草 六丁

△菅刈 六丁 △藍 △あじ刈 六丁

△薔茂 六丁 △青田 六丁

△田草取 六丁 △芦茂 六丁

△林檎実 六丁 △早桃 六丁

△青鬼燈 六丁 △麦蕃椒 六丁

△藁荷子 六丁 △凌霄花 六丁

△凡蘭 六丁 汐見坂 六丁

△神馬藻 六丁 △瓜 六丁

△豇豆 △小角豆 △青豆 △げ 六丁
△十八ろび

△甜瓜 六丁 △瓜皮 六丁

△白梵天 △梵天瓜 六丁
△干瓜 六丁

△熟瓜 六丁 △菜瓜 六丁

△南瓜 六丁 △南京瓜 六丁

△阿古陀瓜 六丁 △桔花 △紙 六丁
△紙 六丁

△紫蘇 六丁 △蒜根 六丁

△胡荽 六丁 △鱧実 六丁

△夏切茶 六丁

△種植 六丁
種く。壟。水とそく。さう。水とそく。さう。

△生類 六丁
此部より六月一ヶ月のいき物であつたす。

△燈蛾 六丁 △蟬の法声 六丁

△蟬脱 六丁 △空蟬 六丁

△夏虫 野 △残蝶 野

△金龜子 野 △鳥毛虫 野

△蟻 野 △蜂蟻 野

△練雲雀 野 △藍雲雀 野

△鶴鷹 野 △鯖魚 野

△川狩 △お佃 △お酒

△海月丸

必用 此部は風雨占日取の記
料理献立其外重法の事記

△養飯 野 △瀧繪 野

△糲飯 野 △冷索麵 野

△瓊脂菜 野 △醬油造 野

△納豆仕込 野 △ひし造 野

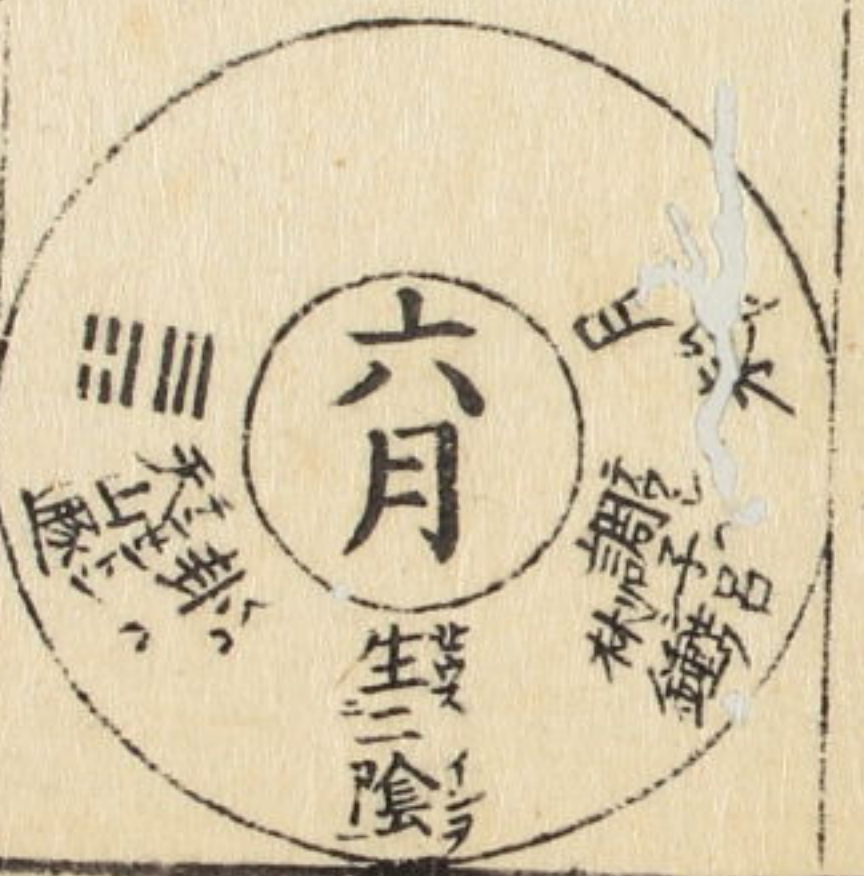
△奈良漬製 野 △麻地酒 野

△水の粉 野 △砂糖水 野

六月之部

△印ある能譜の
季と持りの

陰ハ上天ト
地下小ありて
此時陽氣
盛なり其
時令小陰
ひて仁慈と
行幸



異名

△賸月 △朔月 △陽水 △庚伏
△元陽 △季夏 △晚夏 △恒夏

△水無月 △鳴神月 △常夏月

異名註

△且月 △水雅 六月と
且と云くあり △朔月

坊山井出 ○陽氷是詳なり 疑ら
く賜氷の誤なり ○庚伏六月ハ

火旺ニ金火と畏る庚日心と伏と
つくり依て名守り ○元陽ハ旱とつ

○季夏ハ人の夏ハ晩夏抄れ
つる夏とつるハ祖夏ハつる夏

六月 異名

△林鐘の林の衆に鐘の聚るのつま

る事、物のさへあつまる事といふ

○鐘と鐘とて、やのかりやと

△風待月風

の緒を月をれいつつ△水無用

水ありと云畧△鳴神月雷多故名

莫傳 涼月

風ふけい流は流るつらとある

とく、今月のことよとをれ

藏玉 とて多の月

りりともい妹まうことせん、夏の

月物えらる花のこころか

同 すがら月

をたかともるあまのりふらうの

松風月の夕をこそある

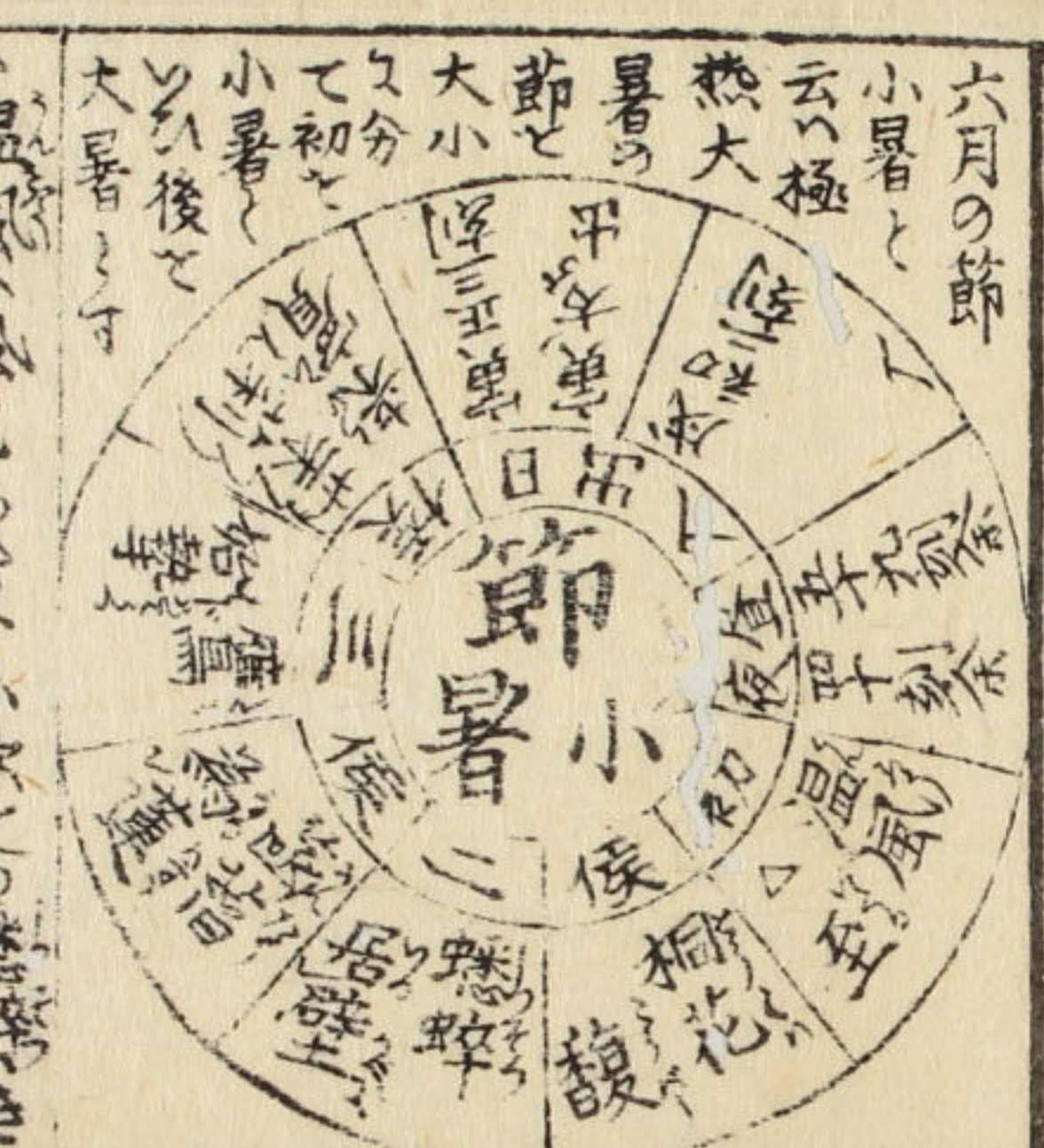
秘藏 いとく今月

わくき、次ちんてくるん

いそ、今月よめわらえとて

節 七十二候。草木七十二候。日の出

入。昼夜長短と記。註を加ふ



△温風の風もあつてふ吹ての暑

さくこと秋の氣道くたりし小

より生れあれとすと得動ぬぞ

○鷹始執事とい鳥を取て字と

とらふ秋の金氣直つくの自然

鼻感して鳥を取て殺と事と

るす氣動その蓋道へ蓮の花

の名より蓮の実は名らう。桐

花は此月香。未利日本

又はよた花より慶長十四

年島津家久佛菜モリニ花

を献せし事あり

梯氷の面はひらろをす。枚の下風
皇の受くは代の手先。山下風
士者。宋海。花の陰多。岩
降。物。雨。ま。い。ぬ。夏。日。土。三
けて。水。目。氷。室。山。来。の。松。が。塔。く
連。神。や。り。あ。や。耐。り。砂。り。か。宗。祇
非。氷。室。山。葱。の。茶。白。日。夜。其。角
夜。事。の。上。れ。文。抄。し。物。解。十。ナ

氷室 周礼ニ出水室
故事 王主ル官ナリ夏

コレヲ群臣ニ賜フトアリ又左
傳ニモ見ヘタリ日在北陸而
藏氷西陸朝靄 忌火の御
而出之トアリ

飯之供 忌火とい不浄の火を
打らるると云内膳司
より月次の御神事の食を奉る
を大床子の御座にて供へ奉る

獻體酒 七月晦日迄
毎日これを奉る

一夜酒 今日造まへ明日ハ供
とらゆ人名付る

春め遊べけよい飯 松ヶ崎
のいよ酒家定 氷室祭

祇園會銚のら 愛染奈 大坂
と祇園社奈 奈等

駿河 富士詣 今日
九日まで登
山するあり

非 際宮のつりろろろ 富士詣 謙事
晴ていよこ日記 其角

安藝 巖鷲市 今日より七月八日
十日ごろより芝居者商人
多く来り甚どあそび

三 日 天気 雨ふれハ今月中
やうけく俗ハ梅雨

返り 京 高橋虫 本所
干九日 江戸 法恩

とさり今のわまさひの事うり
参中行司 前大納言
参子代も参へとそまへ六月の
まふのこまひも君がまふく

寺谷中宗延寺 四 六月會
法花千部執行 日 傳教大師

忌日寺々行子の坂
枕御年高と云く有 江戸 其

天王 五 祇園會山 江戸
祭 日 祇園會山 初

牛頭天王祭 六 天貳節 宋
大傳馬町ニ目東 日 天貳節 神
がわが所へ出

帝詔して今日と天貳
の節と人の不成就見 天氣 晴

秋收多し雨多し秋水
多し風雨多し米價貴し

製衣神麴 今日も製するふよ
一ろし本艸小委し

水貯 此水と取淨る 壺に收め
貯ふ一年と越してもとく

京 祇園手水の井と開く。鳥
九三条坊門の南はあふ井え

今日より十四日まで蓋とひ
きまめ引松立しと 往來の人々

水ひびき 七 祇園會三社神
休りあり 日 輿今日卯の下刻

本社より祇園町と四条寺町
御旅可ふ十四日まで御出さる

七日より十八日まで四条
河原の夕とくみあり是と

河原の夕とくみあり是と
△河原の夕とくみあり

祇園會々何ふ被ふ人の山 保友
狂引てあると見れは 山祥よ

るはや祇園の會者定 雜て 行風

山 卯下刻四条高倉より
寺町へ出松原迄下りる

より東洞院へ長マ 鉾 函谷鉾目
鉾行て自分の町々へ出る 菊水

鉾板下鉾 鉾 笠鉾 岩口山占
出山 蓋宗山 郭巨山 琴破山 堀堀

山 白泉天山 太子山 太藏山 芦刈
山花 盗入山 山伏山 天神山 雞鉾

山花 盗入山 山伏山 天神山 雞鉾

江戸 神田天王祭 南くま町 御出の品川天王祭 両

社の御輿中の橋のうへへて 行合南北へふる故は行合の橋と

八 江戸 浅草天王祭

九 京 北野天満宮九度 参り参詣あり

鳥越明神祭 隔年子寅辰の千住 橋の上へ綱をひ合年豊凶と

十日 御躰之御占

神祇官の官人主上の玉躰を御 けくしみるあり人事を占ひ奏と

十一 公事根 京 吉田西天王祭の比 源を見とあり 叡山恵心院 源信 忌

江戸 神田牛頭天王神輿小船町 御旗 今日出十日

十二 月次の祭 十二月の御 諸神へ御

幣と奉り 神今食 伊勢大神 宮と勧請

申さぬ天子ふくし神膳と供 せよとのとる 年中行入道大納言

林もわりのとるなり

京 松尾神 二日 天気 今日烈 風と書

と邦若譜 解齋之御粥

日の御座は大床こそ其盤一脚 立御粥ありき土器は和布の

御汁物とそつと三口 京

祇園會山 堺 大寺三村 不成 船引初 明神祭 日就日

京 卯下刻山鉾三条東洞院

寺町へ出四条へ下りしり 西へ行自分の町々へ歸る橋舟慶

山八幡山宇治の合戦津 明末、あまの

役行者山あまの

鈴鹿山鯉山 鷹山 黒山

船鉾未刻 神輿三座御旅所

条寺町西へ渡り 少将井の

神輿三座四条東洞院より上り

二条と西へ御城の南と文宮へ出三

条大路を御神供社へ至り三人

三條黒門通の角あり 二座の神輿四条を

とく小鳥丸へ出せしむ 松原へ

下り西文宮迄行北へ上り三條御

神供所へ至り三社の神輿一所

會一か 此所ふ 神供と奉り 吟

改り 三條と東へ寺町を四條本社へ

還御非 山くやまて 出る せ

のと 琴の 山の 山の 山の

まら くり 乃し 山の 曾り 利し 江

戸 龜井戸香 大坂 難波村午

取社祭 頭天王祭

近江 △竹生寫祭日今明 尾張

△津島祭今明日 五京祇

△芦御輿△熱田祭

園臨時代祭 勅使立あづ

奉らると公事根源あり

えん せれ も今 日は 浄花

院垂拂吉 江戸 △江山王祭

田小角豆祭 礼隔年 巳未

酒支の年祭の 祈り 月の 笠下 へ

赤坂冰川大明神祭隔年

○浅州観音祭今日ひん の神事

○芝浦小輪網下 今日返 禁制

大坂 三津八幡神事昨 天王寺

講堂蓮華會午 の刻

富士雪消 今日さ 富士

の雪消と ころ

方万 善ふ 婦の 心を 月の

連之てはつ一見夏のふの雪省相

十六日 嘉祥祝 △嘉定食 嘉定錢
△かつ 仁明帝の時

豊後国より白亀と奉る吉兆より
て年号と嘉祥と改む一説又

同帝の時御代の采と賀茂と祈ら
せり今日吉日とて御被あり年号

嘉定と改むとあはれも実記見と寺
一説より室町家の納涼の遊ふ

揚弓を射て負より嘉定錢
十六文を出と嘉定は宋の年

号十七年まで毎年錢を鑄と
し元年毎ふとあり此元年

より錢十六 袖直 袖留も
支を用ひしと 男子

とも今日袖ととありて振袖と着
し座鋪へ出て父母よまると人

盃をいひき乳母とととと盃
事あり其後留袖を衣て月の

出ふを見よとくれよりて月
見の祝儀ともと故実なり御

作法の猶 伊勢 △外宮の御
故実あり 祭礼あり

讃岐 △志渡寺
祭 十五日迄 筑前 △博多
祭 明日迄

七日 京 北野東向観音開帳十八日
△相国寺閣職法○等

持院虫干○か 大坂 御盃 △夏神祭

伊勢 △内宮
御祭礼 安藝 △嚴
島祭

八日 京 祇園御輿洗 今日み くよかき奉る○山崎

室寺観音開帳○桂川神事能
并大二衆山門のちと執行す

江戸 四谷天王祭
隔年申卯巳未
酉亥の年あり 九日 観音会
日成道

十日 京 △賀茂御幸洗祭 十九日
△座頭

の納涼、清涼菴くつゝ寺へあむる
俳 目ええぬ見の産みの涼水掛口

狂 座次危涼しくされ、酒のれ
てしとくひそ平家ゆきまう 宗増

日九 天気 今日雲さうりたれ
ハ豊年のふりし

京 △鞍馬竹切 富所の土人本堂
と西観堂と両所集、西方よ

青竹と下又井又切て立置本堂の近
江方観音堂の丹波方と二山の院

奉大法事行ひ終りて双方相違定
声て合、彼大竹と三伐と七曲の切石の

りく走りゆく早三方で勝と守夜
よ入て奇怪の事も多くありを

一 大坂 △上難波祭。はるか町
仁徳天皇の御祭礼と俗ふり

祭云社 不成 京 梅の尾
内倉箱 日二 就日 虫千 十日

院御景御開帳 水無瀬後鳥羽 大坂 △座摩宮
御抜

座摩の祭神五座入神輿御渡り
の道筋の朝辰の下刻まるとと

本町へ出塚と高麗橋へさうら夫
より東へ大津町のおさび所へ入る

同く申の下く同くを
久太郎町へ西へさうらて還御あり

日三 北 京 松尾神北
事能 日四 京 △愛宕千日
詣廿三日の

本明して諸人あこ山 〇東寺
後宇多院御忌并弘法大師像

開帳 日今明 〇松尾神事能 要法
寺虫拂

江戸 芝愛 日五 京 黒谷虫
千

〇本能寺虫千 〇誓願寺 江戸 亀
虫千 〇妙顕寺虫千

天満宮神輿舟とて堅川より一
の橋は川口まで渡御此所まで

名越の御 大坂 △天満天神宮
御抜朝巳刻

神輿二座渡らば天神橋通

を大川とりの濱側へて難波

橋まで是より舟を召寄大川とるび

と島おひの宮へ入る夜入て還御

丹後 △あまの橋より

越前 ○切き片文殊會

京 本國寺虫干

大坂 玉造繪荷夏神樂

節折 竹を主上の

天氣 風雨あまの米

六月 日令

住吉祭 ○妙心寺方丈虫干

加茂水無月飲 今日と晦日ま

大坂 内平野町神明同断

節折 竹を主上の

天氣 風雨あまの米

京 本國寺虫干

大坂 玉造繪荷夏神樂

節折 竹を主上の

天氣 風雨あまの米

鎮火祭 氏の人火を打て官城の四方の隅

道郷食祭 是も都の四方

大抜 昔の百官とくく朱雀

草といひんべ。此水無月抜の

春の木夏の火にて木生火く

其外も皆相生るれい夏より

秋よりつるい夏火秋金火尅金

と尅さるを抜ふくうり然ま

ども土用四季のあつて夏の土

用を以專とす是中央土用の

位なるを以てるりあつかひてい

と抜川 **蠅ふし神** の

どく悪邪多きといふ日本記の
いづ是れ夏の熱邪をいふなり

◎とまふ子あり人律もをまて
今日ハ名神のくくくをまふ

茅れ輪 午頭天王蕪民將
来ふ敷へぬ遺風

◎疫癘くるとき時是とかれ災難通
能振袖と結と際る茅れ掃水翁詔

京 ○上加茂水無月能
○建仁寺泉涌寺布薩戒

江戸 ○浅草寺花講
△佃島住吉の御後

大坂 △住吉御後 所より後物
櫛の挑灯しろうくの如かり

手とけりて渡る午の刻頃よ
りいふより鷹鳥師社人社僧神

馬等かき限りもなく次第の
列を守りてまゐる四社の神輿

と祭奉る社務ハ車にて反橋
の本小立る神輿一社七度

れ濱ふ出奉り潮うたりひ
よりあひそりより堺の宿院の

御旅所へ遷幸あり神人のつと
と奉り夜に入り神輿住吉へ還幸

其節堺より送り者住吉迎人多
火ととり身夏登のじ是と火替云

◎狂 後同のゆく方や淡路島嵐雪
狂 後同のゆく方や淡路島嵐雪

全と冠と
△近江 唐崎千日
祭り御後

月令 此部ハ六月一ヶ月日
の定まらざる事と記す

土用干 △虫干△虫拂○書衣等
の中は白裏と去之故虫干云

◎能 嫁合ハ四の枕を土用なり其角
様腦ふ世をぬぐこの様うか全

京 妙心寺虫干○天龍寺虫干
○大徳寺虫干ハとも定目也

施米

山寺の僧は米塩を乞ふに
公より下さる（注）年中行事

この月のきふより暑て知れぬ
君のまゝの秋のこのときは

雷鳴之陣

かきありの声
三度高くなる

まは大将以下近衛の次將迄
弓箭と帯し御殿は孫廂み

候して天子と守護し奉る
と公事根源等小見へたり

香薷散

暑氣の頃専ら
用る菜方なり

暑氣のあつりたるを治す
（非）香薷散は蘇合香丸を其用

夏節

小兒の頭面は無名
の腫物なるをいふ

霍乱

病の名は夏瘧
霍乱妙薬陳皮生姜

水煎用也のありの根より芦
の葉とせん吞てより（注）たごの

実香需ぎてのしるべり又法
のしをねりわをふけてより

浚井

曝井ともいふ井戸
替の事新井の義

あて夏日井と新よといは瘧病と
やまをといへりむう（注）此月

井水と替しときり今七月
よ井をいふふふふふなり

三伏

三庚閑日ともいふ夏至
の後第三の庚此日を

初伏第四の庚を中伏立秋の
後最初の庚を末伏といふ

占候

三伏の
内西北

の風あれば極月氷り多し三
伏より熱すれば冬雪みなし

○三伏の内塚裏とればあし
○木と伐りて虫をいふなり

九夏三伏

九夏の夏九十日
三伏の訣は

船遊

△大名の我城よりや
舟あそび 季州

汗疣

熱拂瘡もいふ○夏
身うちよこぬる物

あせり

あせりの妙茶

その切口をさうてよりー○又

かぎの土灰粉あてつけてよ

ー○又天氏粉とほめて妙

白袋

△掛香 掛香 掛香 襟ぬ
いさやふ妻の衣 青か

程や寝も白ひ袋のなびるや

丁子かいらの中よあれそ 久清

簞

竹のあこらる 庭より暑中
是とあそて暑とさる

なり○又藤してあこらるもあり

龍殿 龍殿 龍殿 龍殿 龍殿

泉

△泉殿 龍殿 泉と水の流さふ
たてふ家之殿と家之事 龍殿

瀧をこらなす瀧のそはふ建る殿

秀 堀川百首

永緑

弦み子の杖きく成ゆい

いづも秋れをむるやあらん

續後拾 泉辺避暑 公通

其のむと岩陰をうらなま

下より夏もかよひざうけり

雪玉 水風晚来 顕季

夕はあよ弦みもあけまを

志がえりうら風涼かりたり

散木 對泉忘暑 家経

下ふふ思ふのあけあさうわを

あふきの風をわら人もあし

月清 對泉述懐 俊頼

身けがれふあそあうたう款をい

玉舟の水もえやう清光森

玉吟 深山泉 家隆

人かきた清あけふあそまを

任るれよけれふ乃下りあ

雪玉 樹陰散泉 贈左大臣

松の木のあそりうらあむとあ

ワダガひらうら秋のまにたり

王吟 夏向泉 家隆

結ぶよ小窓の清き水ありて人
神みこさくこころけ下を

山家 向泉待友 讚岐

ゆくゆくといふ舟のまを結ひけ
庭かたも新も君をまうらん

詞増し。湧く。濺る。出る。洩る。松

陰の清き。若くもまてくる。万代に流る

け多。蛟。本流。山陰。谷。庭。志。せ

ことあかた。まはるる。あひ。あひ。あ

よそき。りり。あつ。あつ。あつ。あ

りり。あ。かく。かく。あ。あ。あ。あ

運 本流より流るる。あ。あ。あ。あ。宗祇

ま。ま。ま。ま。あ。あ。あ。あ。あ。あ

狂 友此日のあつとあつとあつとあ

よ小結てよああああああああ

清水 △清水が源 △清水むき

△清水で △清水むき

○石間 △あつ清くさめる水と

云源はこころけとありむきあつと

手もそ汲る清水汲も同一掬

とらせた入でささささささささ

ゆがさささささささささささ

⑤ さささささささささささささ

結の清き結ひつるまに仲実

⑥ 清き結ひつるまに仲実

⑦ 名流れとつとつとつとつとつ

あささささささささささささ

雲峰 夏の末は白雲をい

時の間よつとつとつとつとつ

午より後小多し此雲より立

のかり山よりけさきて下の根と

くす次第も山下ろくろくろく

夕まよとまよ

⑧ 夏雲多奇峯 判明が詩あり

新題林 為綱

⑨ 雲さささささささささささ

いさささささささささささ

草菴 頓阿

土用中の天氣定む雨ふること
あつたは曇まは土用中の日和
ふらふは晴天たるは土用中日
和は○稻の豊熟土用を專
天切ふは此節の日和く暑強
くは虫生せんよく實つ

辟瘟疫

土用蒜赤小豆と井
華水にて用ぬる年

中疫疾の患わしとつ

非ふんはくのぬるはちのむる其角

夕立

涼雨暑雨白雨○雨の
ち理の本篇ふる

夕立の事ハ和漢の書ハ正理と
みりさなる龍のふけを
ふの妄説なり夏月にくく乃
夕立りりがさ豈はくを龍
ちるべやそれ雨の地の水氣下も
天の上りて陽氣散してちり下る
ちりちり湯氣けちふあつ
とちり滴り下るが如く大暑の

節ふ至りて天のふくともくさの
陰氣ふみなり高遠ふあり其下ハ
陽氣ふみはく陰氣のふく
とくさも上らばて陽と散
とちり長雨さし或はちるく
ふくつと曇さとも陽氣下く
してこれを散ぶふよめてさく
晴る夕立とて暴雨ふるとハ
地の濕氣陽ふり立ちまのかり
陰氣のふくまははくされは下ふ
ひり立ちる氣ささばき時ハ中
途陽中小水氣とさき散せんと
とる間ハ下より段くひりのす
と甚しといふありありあり
下るるそそれゆへに其水氣の
ちりく集りたる間のと降ふより
一二二下の間もちり所とちりぬ
所あり其水氣の上るはものあり
山くはちゆか白雲とて雲の
峯と詠ふは外よりこれ

を空より出く雲のまうるれども
 左ふみれば水氣と陽氣とてし
 のちまて次第ふ立上り下より
 段く上ると時の白き氣集りて
 山ぎの野次第ふ黒くさぐる是
 いよく水氣の多く上りにより
 てるれは雨ふる或は白雲り中
 天こそ高く立上らむ横へかび
 けり雨ふば其故は下よりつと
 上を氣止むにより上りし水氣も
 陽氣とて散ざるゆへ横へるびく
 ちり山ぎの根とくともさ
 るも上り水氣つとたる故もれが
 つと上を氣さきふより上へ上り
 たるも散りてさるば山林多と
 野の水湿多きより度く
 夕立さるわり山ありても元山の
 水氣なる富士山など山のうり
 より中途もその材木あるにより
 地中より水氣上り雲をかかむ

ともいつくきふ雲を山上のさ
 山さるによりてその夜電光すは
 其方角より雨ふるは是も水氣
 の上りて水氣上るとつと陰を
 くりみでの上りてめさる陽み
 びされて陽氣の如く上る其陽
 氣發出る時ひうく火のいも
 るを見さるけけり黒いと
 ども火災さどめて多くちめを
 本性をあらしてあり光も陽
 氣の上りけりれども故か此
 る方より上るとの烈く時直
 れよりゆかりある時登日ふる

新古今

公経

あするるをの玉ささるるびま
 一しつさるゆかりらるる

千首 夕立早過 後拍原院

あつたやたの樹のさるるま
 そをともさるるるるるる

玉葉 旅夕立 伏見院

あつたやたの樹のさるるま
 そをともさるるるるるる

神を河へあへと夜う務らふ
續古 村夕立 知家

蚊あり火のけりてあつたつたの
くもにさめりをら乃山月く
玉葉 行路夕立 基氏

あつたつたのけりてあつたつたの
わけてそやうん夕立乃雨

詞 弱り仍。風さく。雲はよの
はま。あつたつたのけりてあつたつたの

ぞ里人。まよひをりあへぬ。さか村
多。そぞが。かきとらふ。新婦涼く

雨あつ。け里
運 浮橋とつや夕立。天は元宗牧

俳 夕暮は花のけりてあつたつたの
夕立や内着なしくおれを 全

狂 中よまのあつたつたの
うけるがはへと神合羽る常林

詩 白雨季字對句 同上

竹 竹冷新雨後 万壑驚雷起
ユフダチタケスミシ カミナリ山ニヒキ

山 山愛夕陽晴 千峯鳴雨過
ユフ日ノヤニクイ 山ノヲフツラユク

詩 白雨七字對句 詩礎

雲 雲開星月浮 山殿 喧雷霆
山上ノコトニオレシキカ
カミナリ山ニヒキ

雨 雨霽風雷繞 石壇 抱殘虹
カミナリ山ニヒキ

詩 白雨之詞 唐 韓偓

猛 猛風飄電黑 雲生 風ハゲシク
モウフク

ニナリ 雲々 高林 簇雨聲
タルグ 雲々 高林 簇雨聲

雨 雨休風又定 夜 夜久
カセモオダヤカニナツ

断 断雲流月却 殘明
タル 断雲流月却 殘明

月 月ノホノミユルケニキ
又ヨクウツシ得タリ

露 露涼 秋の季
つもとむらり秋の季

夏 夏露 夏の露
はも秋の月のるれを
夏の露とよむは

世への叫ぶおさたる蘇をこし

① 十首

為尹

しげりゆ世をのびるまづら
まきへくふる世のしたる

夫木

為家

ふらふら家をもよおすのちのつひ
空のやまのこころをこま

風薫 南薫 古文又薫風自
南来あり六月又

あく涼いき風さう

② 連 風くさくさや浪のむさう船巴

③ 帆 帆さかると船のこころをさる凡其角
浪をさるやうに帆をさる凡其角

青山嵐 青東風 土用のころ
空一点乃くもりも

吹風といふあり

④ 俳 鱗乃れはく逆さるまはし 一鳩

⑤ 詩 薫風五字對句

堪露飛堯酒 清暑澄潭月
サカモリ ツユスミク 月カゲニアツサラスル

薫風入舜絃 開懷累謝風
カウタシナイロウルホニセサウラ フツカセラカレ

⑥ 詩 薫風七字對句

詩體

毫端蕙路滋仙草 逐風輕
クサモメイクニウルラフ カセモテクル

絃上薫風入苑春 水亭開
コトノ子丸セニツレキコユ イクニニキク

暑 溽暑 燄暑 極暑 蒸暑 酷暑 炎日 炎熱 燠日
熾日 熾日 炎熱 炎天 炎つこあつ

⑦ 新撰六帖

行家

水各月のてる日れつりのけまのど
あつこのあつちり遠くあり

新題林

通茂

あつこのあつちり遠くあり
あつこのあつちり遠くあり

⑧ 俳 せつひけりあつちりもあつこいナ
あつこのあつちり遠くあり

帆柱の影よびふらふ暑さか一丸

○送之ヲ○聊具ヲ○捧呈ヲ○献呈ヲ

○奉上ヲ訪問ヲ○窥光震之志ヲ

○訪起居ヲ○報平安ヲ

○同報答ヲ 左ノ尺牘ナリ

由使候時暑氣為ノ巨熱ヲ
勞不使訪炎旦ヲ 被惠ヲ

鮎一桶之魚ヲ幸饗食供膳ヲ
魚醢一器ヲ幸饗食供膳ヲ

之客ヲ美味可賞殊恩ヲ
之客ヲ美味可賞殊恩ヲ

須謝ヲ加減宜別ヲ与表存ヲ
須謝ヲ加減宜別ヲ与表存ヲ

暫待ヲ來會ヲ
暫待ヲ來會ヲ

尺牘 昏替 上中下

勞介使傳命ヲ○走使ヲ炎日燠ヲ

日○熾日○蒸暑被惠ヲ○厚賜ヲ

嘉惠ヲ被投ヲ○分賜魚醢魚醬ヲ

○美肉饗食供ヲ○偶有客至共ヲ

適口ヲ○以饗食客美味可賞ヲ○口ヲ

美可愛ヲ○殆潤藜苳之膳殊恩ヲ

須謝ヲ○拜而受之ヲ○愛我至矣ヲ

○九拜以謝暫待來會ヲ○期顧ヲ

問ヲ○叩謝以面ヲ○待問尋ヲ

月清 松下納涼 後京極

松の影ふと夜そよまれば本づれて

秋を中とせりる巻乃す川を

續千載 本納涼 為氏

よきことなきを待たぬはなれり

秋風ちりた夜子のり

詞原 風。袖。衣。水。後

山陰。野ふも。本納涼。な。お。り

よま志。ぬ。秋。風。か。く。も。山。下。水。

若。山。の。湯。ま。玉。ぎ。静。涼。

泉。は。あ。ま。り。の。水。ま。あ。ま。る。涼。は。

あ。ま。り。の。水。ま。あ。ま。る。涼。は。

友。を。忘。る。ぬ。松。陰。本。陰。ま。あ。

秋。風。か。く。も。山。下。水。

蓬。芦。風。山。風。夕。風。あ。ま。る。涼。

松。風。本。下。風。月。の。光。は。涼。

涼。く。も。ま。あ。ま。る。涼。は。

水。は。あ。ま。り。の。月。の。光。は。涼。

ま。あ。ま。る。涼。は。

雨。の。音。は。涼。

楯の葉ら

竹

林

涼

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

雲連海氣 琴書潤

水殿涼

風帶潮聲 枕簟涼

青琅玕

沙界樹涼 晴作雨

着衣巾

石渠泉聲 暗流水

涼風來

詩 暑之詞

何以消煩暑 端居一院中

眼前無

長物窗下有清風

熱散由心靜涼生

為空室

此時身自得難更

與人同

晚夏

夫木 為家

秋近

草木

百日紅

苧麻

麻

繩

麻

△櫻麻 花の柄は似たりあり
△夏引の糸のあとの事あり

△麻刈の排の麻刈と夏とと
異名 漢麻。黄麻。麻仁。油は制して
麻の皮とてたて糸よる

◎夫木

寂蓮

賤の女がふんじくしとふ居る

さくあさきうあいの下風

夫木

土御門内大臣

かろるもあまのま枝のあつれ

えれ未奈よるれけき

◎排 朝起の妙りまそのかせさ小徳元

◎真 草 和名かむひ。真草

苧麻

花青さ穂をみる。出羽最上の産より奈良晒を織る。是より東国西国共なく植る。畿内東南より伝へて麻と作らる

綿の花

ひかりは穀皮でりて衣服とす

是を木綿とて是紙のこり今衣服又織る木綿といふ

古名と用ひたり神人の用

中世民用専ら麻布と用

今の州綿は桓武帝の朝に異

国より傳る唐土より宋乃

末とて植る本朝より二百年

中絶したるを文祿年中に

種を得て諸国に植る。多田

綿花黄は実白く糸よりけ

尤可けき少き今これを

うんどの瑕手綿葉は深き

さみあり白花あり挑大くは白

然まとも挑よる。神樂綿

花白あり黄るありちる

生す神巫の持ッ所の鈴は

是と植て大に利あり。佐利綿
の枝葉赤色を帯ぶ。桃多し昔
姑この種を得たり。聾乞ひ望
めども種をあるべし。聾憤恨
とて其妻を去りし。依て佐利
綿といひある。せうと。畑草綿
の葉青色して間々小葉を生そ

新撰六帖

家長

あまの太らあまのあまの
うへへ綿乃たひそあけ

竹皮散 △竹の皮脱ると云
ても季にあらんべし

鳥扇 △ひあき。本州射
干と同物と云然と

花形ちがへり。莖葉なぐり
の長さことれりの射干より莖
短く葉扇のごとくあびる。あ
ひあきなり。されども和名ふと
一種として射干とあきとあきと
と訓むるより連俳れし

射干とかくあり

夫木

西行

さしあきさるあきとるの
かすあきさるあきとる

玉簪花 白鶴山。大さうりの
と俗に亀やじと云

釣鐘草 地参。紫花とい
らく形釣鐘の

又白花淡紫の花あり
非の種なきは付る名に載入

麒麟草。高さ一尺。似たり
形存慶州に似たり

馬鞭草。馬折。鐵笄帯。
花より色より穂の

あき。六七月花とひくくへ

夫木 俊成
紫はるふ遠む。へるまのつら
むつらげたる世ふもるく

猫見眼睛草。澤漆。此
草の形

燭臺のこた故。燈臺艸と云野は多く自然と生るるなり

剪春羅 春羅。漢宮春。 眼皮俗字なり

○さうさ眼皮。紅白さたさ人花の大きと錢のおと

狂人のふりてり所解るるを

虎尾花 花白し虎の尾の如し似たり

畫顔 鼓子花。旋花。

俳屋教に米搗きむ衣色芭蕉屋白や膝のくく新枕魚左

狂寺のやの屋上りどろりかそと敷へ白くや花の咲く人藤卿

夕顔 壺。瓢瓜。祭の花

六月頃白き花開く登りまを夕方は咲く故に名づく

夫木 定家

けりするを方人の社うとよあゆみし終るゆふをたむ

首 垣夕白 為尹

か依りの竹のあけ経末るて

詞 白翁。あぐさる。くれそめて。あぐ。垣根。藤。房。難。光り。さる。咲て。そそ人。又。向。れ。情。外。面。娘。の。女。麓。行。是。信。音。紗。巻。

運 夕白のあぐさる。後。宗。春。

俳 夕白のまゆらき。垣根。か。宗。養。

夕白や一飼の守花の若其角

夕白や白き鶴垣根より 全

夕白の雑炊黒き兼ふ越人

夕白の紅の内皮とらじ夕白のや

夕白の今うも軽い喜り山 正名

詩 夕白五字對句

幸結白花了 セウチウニエ。カサラ

松虫声不去 シムシムコエ

○形燕の尾は似たり。根は白く
こゝろ一根本歳十二の子を生じ
○沢海とわがさうして古人乃
俳借をもよそたり誤りあり
沢海の和名はまゐり
いへておもしろの名なり

能おぼろのそとりの純子外嵐雪
沢海やる宵碧く雨あり野童

河骨○萍蓬草俳河骨や
椀よまをゆる夜半樂嵐

菱花○菱。菱。五六月小
白花開く 夫木為家

舟こゝろたゞも淋く青なるま
菱るるやひさしくん

詩 菱五字對句

同上

淺渚菱花亂蟾影搖輕浪

深潭行葉疎菱花映淺流

詩 同七字對句

詩 礎

松葉正秋琴韻響翻池上

菱花初曉鏡光寒小池清

詩 菱花之詞 唐 李嶠

鉅野韶光暮東平春溜通

影搖江浦月香引棹歌風

日色翻池上潭花發鏡中

五湖多賞樂千里望難窮

日ノ池上ニサシテ花ハカガミノ中ヨリ生
ズルヤウナ五湖ニハヒシノ多キ所ニテ千

里ノ眺望
ヤムコナシ

蓮花△とら子 蓮房の葉
△白蓮 △紅蓮 △水芙蓉

△池見草 △露堪草 △蓮ハ

泥下り生して志るは清浄なり
性糞溺を忌む周茂叔が云く

菊の花の隠逸あるもの牡丹の花の富貴あるもの蓮の花の君子あるものありと

文治百首 西行

とをみたる月のひかりをまじはばよ
とろろをえてれさうまきうか

夫木 蓮開水上紅 千里

秋近く荷あつらふあけうの
くれみ井ふく色ぞとくたる

山家 蓮満池 慈鎮

とをみたる月やとろろをまじはばよ
池はまき乃花さた母あり

詞自入酒のひさし風流まき蓮

系はあけうの月まき蓮あけうの
中守 秋あまき蓮の巻まきの上や

どあたるの池はまき蓮あけうの
まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

蓮あけうの池はまき蓮あけうの
蓮あけうの池はまき蓮あけうの

蓮あけうの池はまき蓮あけうの

非出の表に歌れどもまき蓮あけうの

泥坊の教え水のまき蓮あけうの

狂花瓶のまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

まき蓮あけうの池はまき蓮あけうの

採蓮 崔國輔

玉淑花爭發 金塘水亂流

花サカリナル頃ハ水ノ流モミタレサワグ 相逢畏相失

並著採蓮舟 花サカリノ頃ヲノバサバ花ノチリ失ニイ

ヲオソレテチヲヌアイタニトリ

遊ニト舟ヲエヨホスナリ

碧沼停寒玉 紅蕖映綠波

白紅ノ蓮花ガサキテミドリノ色ナル池ニウツルシキナリ 粧凝

朝日麗香逐晚風多 花ノ色ニウツクシク香氣ノ薫シワタルハ夕風ニヲホシ

出飛揚翠羽過 鳥ケフカキリチ

納涼依水榭 還續采蓮歌

スムム所ハ水辺ノ基ニアツビウタラツクワテタシムナリ

曲池荷 盧照鄰

浮香繞曲岸 圓顯覆華池

香氣紛紜トシテ岸ヲメグリ圓ナル花ノカゲイケノオモテヲオホヒカシヌ

常恐秋風早 飄零君不知

秋早ク花ヲチテヤラレ蓮ト今ニナランヲ知ラスレテナカメターハントナリ

○金絲蓮 紅花 金色の筋あり

甚ぞ珍なり ○大紅蓮 花淡紅

色芭蕉の花に似たり花ありて実のくさ○天竺蓮 花紅千葉一

列はむく昼夜一がまず○蓮ハ子の名あり 菡萏ハ花乃名

かり 始ハ莖の名なり 藕ハ根の名なり 荷ハ葉の名 俗ワケナキ

荷葉 浮葉と藕荷と

あつみの葉と荷とつみの根を藕とつみ花を蓮とつみ荷縫水芝

夫木 定家

蓮 香をたぐひて白くをまじはる風小宗

非 ばまじりて水ものバテニイサト野鳥

蓬江草や雨は多地の水かみ道之
子枝く蛙のさくさくけり風光
狂君子よ呼れ花の蓬江系は
池の味をばけみ先ぞ貞古

詩 荷葉香對句

同上

綠水飯香稻

依崖假松益

青荷包紫鱗

臨水羨荷衣

詩 全七字對句

詩礎

桃花尚憶當年宅

荷花香

荷葉堪為卒歲裳

聞菱荷

新荷

唐 李羣玉

田々八九葉散點綠池初

ハジメテ葉ヲ生ヌ所々ニチラク見ユルナリ 嫩碧纒平

水圓陰已蔽魚 葉イニ若葉ニレテ水ノ色ト

同シ然レ凡九キ葉ハ 浮萍遮不

合弱荇纒猶疎 合ヌアサガノ水クサモゾルリニ疎々トハヘテオホカラス 半在春

波底芳心卷未舒 波ニテヤガテラビ出ベキキサレヲクメリ

蘭花 鹿鬚草 碧玉草 燈心草

夫木 川ふるあさくや河老のあかき

とれ打みわい一夜秘をせよ

とろろんと製さるる小刀を捨て

指を押し皮をさされて燈心を

出さる凡六斤を燈

心半斤出るを上品とす 玉用入て刈さる思置の表不用

ゆかり備後と上品とす女のす

まて此業とてひむ一日ふ二枚

うとさる女の媒人なりとあり

席草 是ハ琉球といハテ同

青鬼燈 酸漿 草 青蕃椒

俗ニ南蛮胡椒。又高麗胡椒云
秀吉公伐朝鮮時波故名付

藜荷子 俗小夏あつと夏あつと
秋生とと秋めう

凌霄花 異名紫葳。陵時
夏より秋まで花と開く

詩 凌霄花之詞 吳震坐

素娥昔日宴仙家 素娥ハ仙
女ノ名。酒

宴せし 醉裏從他寶髻斜 酒
ニ

エフテ髪モ 遺下玉簪無覓處 カ
タフキタリ

髪ヨリカンザレヲオ 如今化作二 ト
レ尋レ死ニヘス

林花 今其カシガ化シテ此花
ト咲出シト戲作ルナリ

風蘭 挂蘭。仙草。風と好て
茂る故に名づく

神馬藻 饒の歳旦より
夫木 信貫

紅豆 小角豆△青豆△十
ハさげ。花白

瓜 種類多し多
く五月に記す 甜瓜

甜瓜 果瓜。美濃真桑村小作
瓜を上品とすこれより今

瓜 の惣名とるなり京の東寺
瓜江戸の鳴子瓜尾州の青鷺

瓜 を上と守駿河の府中根津
の水野和泉の堺舳の松これ

瓜 ら皆名と得し

非 瓜の角

瓜 の角

瓜 の角

瓜 の角

月のをうしと寺大坂の東黒門
又所不作る上品と寺唐る青

門瓜上品とひる又偶然なるも

非干瓜やとらるて子才養小其角

熟瓜 甜瓜の種類 菜瓜

甜瓜の種類と特て

菜瓜亦変する物有

南瓜 文 寛

の頃本朝へ種を得て長崎小作

るまはる諸国は知らる形

尤くむらびる南蠻より

とらるりて南瓜の名あり

南京瓜 南瓜と同種類之

形びざんそくどけじ

かぶらや唐るすびともいふべて胡

地より其始出とらるりてたり

阿古陀瓜 是は甜瓜の

こく煮ててくはる

○南瓜。南京。阿古陀等夏の

季とも多し又秋の季も

を通俗志其外多く秋

出せり。花として夏は用ひ

花とせりして秋は用ひて可

るらんり所存よりべし然

れとも時珍が説は南瓜を

八九月花ひらき瓜とひきぶ

とあり是まを花として季

五月ともてつらるる乃得

のこるんあま記と

楮花 紙をた草。楮の制

して紙をさる木あり

黒ひやうをふら上紙をさる

つとわさとして防明として

多く作る白ひやう青ひやう

をさるるも其外数品あり

○秋葵とつら州あり楮とい別

るの五月花咲くあへは同一

紫蘇 赤蘇。桂在。塩漬小

して食ふ大小二種あり

蒜根 夏よりてたぐり食毒を解し悪瘡を灸す

葫荈 夏実とその生きたるの香を少しくしん忽ちあき香を去らん

痘瘡 けがきを去る法 この実をせんじてつてつる

疔瘡 の色を去る法 疔瘡の色を去る法

繭実 繭樹の皮を剥き水にたじ

夏切茶 茶と賣處の家 六月新茶と壺入

種植 此部は草木植る壅培お株をの事との事

種植 先月より今月も種植

茄子とあひ法 花の咲く時分その葉を取りて四ツはは捨るを以九く灰をかきあけて其上を人はぬきん

壅培 橙。たらむる等又芽の灰羊の糞とつら

灌水 此月暑氣はをた日中水とそくげ

採採 麻草の燈州席州。右の右の此月刈

生類 此部は六月一ヶ月の生もの

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

燈蛾 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黄蝶に似て枯渴なり云

蟬の諸聲 多くかまひひらく
くみくといふ

蟬脱 空蟬。蟬の皮とぬぎ
たるといふ。空蟬も

その皮とぬぐといふも又生
つるせしといふあり

夏虫 夏のよろうくの虫といふ
新撰六帖 光俊

法よしく火入よしの友なりマ
男名代とてはあつらん

狂 夏虫小あつるのいふいであつ
き披見といふ可笑き貞因

残蠅 蠅の秋までものころあ
季ふ六月と

金龜子 蚊蠅 鳥毛虫 蠅
蝨金 蝨虫

蠓 俗は水道蠅といふのく夏
酒をたは生トたりものこ

齧齧 一名地虫又根掘虫。お
やく土中へ生と又

糞土中にも生ど 練雲雀 卵
形いもむいのだと

麥畠中へ産むさうといひあ
ぐりといふてあつとさうら

かひ直といふさふ下ら守先
五六間も腹旁へさうらと

歩いて常のさへく人といふ
入る火網楹の禍は此頃毛を

かへてさうらとあつたひらこ
のそれを練雲雀といふ

○一説は音を入るいさうのさうら
能 巢ふたのいまおねは絡う雲雀舗雲

鶴鷹 たうふいさうとさう
さうらり暑中へ

ひさりの羽とかゆりころ
るれい飛こくより取やと

川狩 鱒 四手網 持網 撒網
等して魚とさうら遊ふと

りり大抵の鮎とさうら事なり
能 川狩やといふさうら汲て粘製里

とをれり日暮まふり次第の
北へ寄り北東風ふかるるを
夜北より昼の照つめと吹はぬ
露をけり縮み甚し此天氣
つく時折々夕立 風申酉
志て人病もさく

吹を西まぜといひ日和つて
より未申より吹を沖氣と
り朝曇り曇り日和つ日和つぐ
り曇り曇り日曇り曇り雨け
まふる此日和長曇りのそ
其うちふとや 出せば曇り

晴るかたけり人未申沖沖より
雲をのぞいて雨とさりして
つ曇り曇りも長さをはくものそ
○北西の風とある曇り雨ふるす
曇り夕立立せせ曇り曇り東風は
けて吹雨雨ふる曇り夜露を
あげぬ○東北の風久く吹
て空晴ると日和東風と

計日北日雨す然れども
終雨ふるるとあるべ○東北

東南の風ふり曇り
湿氣にる下地なり 雲南

み白さ雲出て東へままま
雲とし晴天は夕立ると
志て縮 朝霞東方日出を
小宜朝霞 東方日出を

○朝東方あかく満天へつり
あつれ三日は内雨ふる
志て朝あけと雨ふる 夕霞夕

西赤く南へ廻まり日和秋の
氣小る北へまりとより占候
久く旱の後山谷と
占候

此月暑氣薄け五穀はら
り守蠶はけ新舊の米價貴
○白雲北斗の下小横にる
雨とまる○月内西北風吹り縮み

批あり。○今月西北風はくさくさ吹ひ日和あり。夕立もせず又この風あまの冬河凍りて舟は通ひ不自由く。二十七日二十八日辰の刻風を主る。○東風久しく吹と好ま東風の吹と夜露をわらさず稻生長に
衣服式 帷子を着る袴は浅黄
 小紋。継上下の畧義。綾子肩衣の嚴暑を凌ぐ。ゆめて後製衣の男之式。礼の時 **時衣** 女即花衣
 青 瞿麥 朝日より **女衣服** 帷子を
 衣 おきて薄す
 上臈の縮らみ或いはじらと母ののひんものをまてと嘉祥は月乃祝儀の地い **生**
 人のさぬらむとせす

花之式正 百合 **養生**

心旺 腎衰 精化して水あるよりくばしして腎氣をかくるるべし 冷水ふて手を洗ふと五臓をかくむ沐浴又冷水を足と洗ふべし 風にあらて卧ととまき生冷の物を食とべし ずとて是をゆせば秋小至アと瘡疥を發すちうくと云病の此月ふ多きり 陽と受く發とる地まきハ強て驚く小非也

妙藥方 夏暑はあつれつと中暑といふ香薷散を用

○老人虚人の清暑益氣湯は 人参。白朮。麥門冬。五味子。橘皮。甘草。黄栢。黄芩。當歸。 ○霍乱の 霍香。正氣散。

○時氣にあつり 又ハ食傷の 枇杷葉湯。 ○霍香中 莪朮中 吳茱萸。小ひしやう天 肉桂。甘草。

冬月凍瘡を發せざる

妙術 當月とぐまて暑き日
大蒜とけさたらば
手足に塗きい冬、瘡あらず
と發せざる事 妙なり

厭患拔け妙術 今月熱と
取り黒焼
して石灰と砥石と右三品と合
せ壺に入れて水を入米を入米の
とろけし時あざより血と
出づればよし 此をくまへり

鰻松明け法 蒲穂を正し
油を塗り又
わけて油をわけて又下す
はざる事三四度して其上と
鰻の皮を巻き又油をわけて
わけて火をとぎせ、雨中みも
消る事
されば

六月飲食并料理献立

好 温暖のりやうふいひ
きりのとろふは宜し

禁 生冷とくひのきりてい。非。
野鴨。雁。あひと食へ水痕生を

殘飯 水つぎめへ△水飯もかく
△洗飯。飯。水にて洗ひ食ふ

非 あ飯まかひら
瓜のまづく其備 瀧繪 せじ
さます

精 △乾飯△引飯△冷水こひにて
食ふ河内道明寺お作る物甚は

冷索麵 △冷麩。ゆぐ冷水
ふひこいたるものえ

狂 狂は狂と李白と見ん索麩
の四よりはく湯のあふ系 梅子

瓊脂菜 石花菜△心太(非)あふ系
のちねつと出せ心太(非)風

在 系のものちねつと出せ心太(非)風
價でんきの菜かじしな 遠舟

料理汁

ヤシカ也
大子ん
さつとうがのこ
とろごぼう

さくき
さくき
さくき

皮ふ
一口茄子
ヤシカ也
ゆづ
塩
ます

ふさ
干大こん

清汁
とろごぼう
せん

昔こん
塩煮

贈
とろごぼう
せん

あらい
大こん

とろごぼう
せん

さくき
竹の子

とろごぼう
せん

差味

あらい
青のり
とろごぼう
せん

煮物

のつや
とろごぼう
せん

くもだ
さけの皮

とろごぼう
せん

吸物

せいご
とろごぼう
せん

豆
精汁
里い
糸菜

清汁

とろごぼう
せん

贈

とろごぼう
せん

差味

とろごぼう
せん

煮物

とろごぼう
せん

和會物

とろごぼう
せん

里い
大椎茸

とろごぼう
せん

つげ
青まさ

とろごぼう
せん

竹の子
ふら

とろごぼう
せん

吸物

とろごぼう
せん

六月食物用意の品

△將酉油造△納豆仕込△ひ

しほ造△奈良漬製を

右の品々はとうとうあまやう委
しく日本歳時記といふ各に出る

水の粉 △苜蓿粉水△砂糖水△
振舞水。ふとも夏の鹽

麻地酒 ○暑中ニ呑酒を
美濃。豊後又ハ南

都より出ふる浅茅酒もつゝ
能 研てを瓜とくへを揉みたるは安成

干瓜の法 瓜と二ツは割り
中子と去りハ

九分やが塩とへ一夜をうと
うけをた明日取り出上

下々おおくー干茄子法
日は干とぐー

ワケ茄子ととう皮を去り二ツみ
割りて干け用ると水みりし

て煮る 豇豆塩漬乃法

米糲一斗ハ塩四升合せワケ
さげをさやまがう漬をけハ久

しく損せと茄子と 甜瓜と
又此如くするもよ

久敷貯入法 打綿と箱ヤ
うの物又入

其中ハ瓜をつみ蓋を鉄にて
つゝ瓜こめをけハ百日持さう

尤土用 瓜茄子の類年

中貯法 寒の中の潮を盡
入たくり夏

瓊瓜茄子の類を漬をけハ色
うらぐすして久く持つ潮の渇

より五六丁も沖の潮よりハ
ハちやく々みけとくして悪し

甜瓜年中貯入極秘傳

随合大瓜の蒂より頭よはさあ
 たるを著しそ尻をあげ其口を
 明礬と二斗をくへ木灰と糝半
 分とをく都合一斗をくハ塩二
 升入るけりつゝそ漬置キ桶よ
 てもつがよそもけり風の入
 ざるやうにせよ今日漬をて
 九月より未勝手ふ出してつゝ
 べし味ひいさうそ
 樽ごう事ふし 酸将水子
 と貯法 赤とんと枝と
 清を秋に至て又水を替へ
 かくのごくすれ外の壳紗は如
 透通しこやぶと少
 も皺よばせよう 夏月
 氷と寒中れ如く樽

法 銅の器小厭もを汲りける湯
 を入し口を能けり水れ入らぬ
 中りめで井の底へおろして付て
 沈め半日一日や置取上り
 寒中れ氷より火よりかり守夏の
 内煮凍と持る小葛粉など用ふ
 及びじよ玉はよ
 く出来るるし 又法 つね水と
 口として釜に湯と必し其内へ
 入るそ湯玉のころ時取上り井
 戸の中へ入れ
 忽ち氷とあらと

青瓜越瓜
 年中貯法 瓜を四割小
 口にして一日置でのら新酒の
 樽に詰り張こめ置ハ年中変
 らむ時分の生れ
 如くしよしよし

茄子瓜
 大角豆青漬法 五井塩

大角豆青漬法 五井塩

二升右二品りを合せ瓜大角豆

青々として生れど但 白瓜

翌年も青く貯置

法 赤土一抔 塩六抔 五合右赤

研み合せを白瓜二ツまうめて

つち置べし 米年 夏者火

凍て 海魚も 其外

精進物も 又ハ醬

煮て鉢へあけ水は冷し置て

魚肉久敷貯法

の中へ胡麻の油を火へ入し置

煮熟し物臭か

法 煮き 何

置け 時は 大き 壺の 口は いろ

底の 灰は 上に 置

て風を 通し 氣は ぬれ ぬめ

越て 臭く 取り 出し 先

鍋を 焚き 熱し 湯を 煮き

湯を 煮き 調べ 若し 湯が 沸く

唐納豆の法

京の 福

寺納豆といふ土用前又麥一斗
 大豆一斗麥を蒸し大豆の
 焚二品を能も合せ土用の内
 小糲こぢは福をて四廿日晴天は乾
 白しろも挽くくくも挽くくく
 用中は水ハキに塩二斗煮之
 して能よはぬ此水も右の粉と
 まぜ少くは入いてあひるなり
 あひる小口傳わり少くは入いて
 ちろくくまこの合せはちろくく
 ちろくくまこの加減ありちろくく
 ちろくくまこの長と白しろも入いて
 けと桶小入いて七日置おて又つく
 又七日おくくつれ以上七度つく
 八九月の項よりつるその時取と
 出し七日は色黒く色付くる干かわ
 けてはかた木の葉と上下ふた右の
 納豆でだんご程よりはしてちろくく
 べまひて上よりお世お世おかけかけるなり

此痛之見

笈あ之し土用し世せ之の日
 炎えんてしてしてしてして
 もたもたもたもたもたも
 少す少す少す少す少す
 庭ていはは庭ていはは庭ていはは
 本ほんつつてててててて





寄
改正令博
三長部
四